

談 話 室

第 34 回日本眼科学会専門医認定試験・第 1 回日本専門医機構眼科専門医認定試験を終えて

1. 2022 年からの専門医試験の重要な変更点

2022 年 10 月から、眼科専門医制度は日本専門医機構の専門医更新基準に則った新専門医制度へ移行しました。2つの大きな変更点があり、すべての眼科専門医と専攻医(後期研修医)に大きく影響しますので、まずその2点を箇条書きにさせていただきます。

- 1) 専門医資格が、5年間で100単位集めるだけでは更新できなくなります(本談話室は専門医試験を中心に記載するため、新しい更新基準の詳細は、日本眼科学会ホームページなどでご確認ください)。
- 2) 専門医試験の受験が、研修の修了から、実質5年間(5回の受験)で合格しないと、受験資格を失うように決まりました。

この受験回数に有効期限を設けた影響を受ける眼科医は、専門医試験を受ける毎年300~400人程度の若者たちであり、約11,000人の眼科専門医全体からすると少人数ではありますが、これは受験者に限った大きな問題であるだけではありません。2021年のように3割強の受験生が不合格となる現状が続く、5回の受験を連続で失敗し、専門医を取得することなく診療を続ける眼科医が無視できない人数に増えていけば、日本眼科学会、日本眼科医会の組織率の大幅な低下を招き、多くの学術的な活動や啓発活動が行えなくなるリスクがあります。皆様もご経験のとおり、両会に入会することが専門医試験の受験に必須であり、このことが直接的な両会への入会のきっかけとなる眼科医が大多数であることが現状です。専門医試験を合格せずに、5回のチャレンジを経て受験資格を失えば、その眼科医たちは日本眼科学会、日本眼科医会の会員資格を継続せず、両会を退会して眼科診療を継続される可能性を危惧するのは、悲観的過ぎますでしょうか？

まずは、5回の受験に失敗して受験資格を失う眼科医が、どれぐらいの人数になるのか、どの程度のリスクがあるのか知る必要があります。この直接的な調査は、多数回受験する人が毎年連続で受け続けるわけではないので、実数を正確に調べることは困難です。そこで、我々が今年の問題を作成して、合格者を決定するうえで、最も心配した以下の考察をご覧ください。

表1をご覧ください。例えば、昨年(2021年)の専門

表 1 最近4年間の初回受験・再受験別合格率

回	年	初回受験者	再受験者	総合合格率
34・1	2022	93.2% 合格者 274 名	82.7% 合格者 81 名	90.6%
33	2021	75.9%	23.7%	66.9%
32	2020	88.1%	50.7%	79.0%
31	2019	83.1%	33.3%	74.1%

表 2 全国8会場

① 札幌	de AUNE SAPPORO
② 仙台	宮城自治労会館
③ 渋谷	渋谷フォーラムエイト
④ 長野	長野ターミナル会館
⑤ 名古屋	imy 会議室
⑥ 大阪	大阪商工会議所
⑦ 岡山	TKP ガーデンシティ岡山
⑧ 福岡	天神チクモクビル

医試験の合格率(341名受験)は66.9%であり、3割強の受験者が翌年の再受験者になっていきます。昨年の合格率は、再受験者に限ると(59名受験)の23.7%まで低下します。この合格率が続くと5回の受験を失敗し受験資格を失う若き眼科医が、無視できない人数になることは容易に想像できます。この漠然とした不安を抱きつつ、今年の専門医試験が行われたことを、まずはご承知おきください。

2. 概 要

2022年(令和4年)、第34回日本眼科学会専門医認定試験・第1回日本専門医機構眼科専門医認定試験が、思いがけず3年目に入ったコロナ禍の影響で、一か所に多くの受験生を集めることを避けるために、表2の全国8会場に分けて開催されました。2年の初期研修後に、日本専門医機構が統括するいわゆる後期研修プログラムを履修した若き眼科医たち(専攻医/後期研修医)が、規定の4年の研修を修了し、今年初めて日本専門医機構眼科専門医認定試験の受験資格を得ました。現在のところ、従来の日本眼科学会専門医認定試験と

同じ出題基準で、日本専門医機構眼科専門医認定試験を運営しているため、試験問題作成も従来と同じように全国の眼科教授等から選抜された試験問題出題委員で作成しました。昨年までに研修を修了した(2021年までに受験資格を得た)後期研修医は、日本専門医機構のプログラムが始まる前に眼科研修を開始していますので、従来どおり日本眼科学会専門医認定試験を受験することになります(2022年に実施された第34回日本眼科学会専門医認定試験)。専攻医が受験する初年度である今年は、第34回日本眼科学会専門医認定試験受験者と第1回日本専門医機構眼科専門医認定試験受験者には、同一問題を受験していただきました。

一昨年(2020年)は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)蔓延による行動制限などの影響を受けて、例年とは半年遅れの12月25日(クリスマス!)に行われましたが、今年は例年どおりの6月(2022年6月10日金曜日)に実施されました。コロナ禍中での3回目の専門医試験ですが、今回も試験自体の運営には問題なく終了しましたことをまずご報告申し上げます。2023年(令和5年)は正常化をめざし、大規模会場で一堂に集まり、対面の面接試験も行う予定で進めています。長年試験会場となってきた渋谷道玄坂のフォーラムエイトが再開発で閉館となるため、新橋の会議室で行う予定です。

今年は、午前10:30から一般問題100問(120分)、60分の食事休憩ののち、13:30から臨床実地問題50問(120分)、そして16:00から45分間の「口頭試問に準じた筆記試験」を実施し、すべての受験者が17時までに試験会場を退出して帰路につけるようにしました。

試験後、6月12日(日)に一般問題と臨床実地問題のkey validation(KV)委員会をWebで開催し、試験委員会正副委員長と近藤峰生専門医制度委員会委員長、篠田 啓専門医制度委員会副委員長、外園千恵試験委員会委員で全問題について正答率と識別指数を参考にしつつ問題の妥当性を検討しました。また、「口頭試問に準じた筆記試験」については、36名の先生方に採点をお願いし、6月26日(日)に正副委員長による合否判定会議をWebで開催して、最終的な合否を決定しました。

3. 受験者数と合格者数

第34回日本眼科学会専門医認定試験・第1回日本専門医機構眼科専門医認定試験の受験予定者数は397名でしたが、試験当日の欠席者数は5名で、最終的に392名(男性215名、女性177名)が受験しました。昨年の最終受験者は341名でしたので、今年は昨年よりも受験者が51名増加しました。なかでも、再受験者数が59名から98名に増えていました。なお、現役の

日本専門医機構眼科専門医認定試験を受験する専攻医との公平を期すために、従来受験回数に制限がなかった再受験者(日本眼科学会専門医認定試験を受験)にも、2023年を開始として5年以内に5回までという受験の有効期限が設けられます。

4. 問題数、平均点、合否判定、合格率、ほか

筆記試験は例年一般問題100問と、視覚素材を付した臨床実地問題50問の合計150問で行われます。臨床実地問題は1問2点として、合計200点として採点されます。今年の最大の問題点は上述のように、5年後に受験資格を失う受験者を減らすことでした。合格者を昨年の66.9%から、例えば専門医試験が始まった当初の90%に戻ってくれば状況は大きく改善します。そのためには、1989年以来の伝統である合否ライン得点率6割を、下げてしまえば簡単です。しかし、それでは質の高い眼科医を育成するという、専門医制度の目的の根幹を揺るがします。

図1をご覧ください。1989年の専門医試験以来の合格ラインは得点率60%で不変です。したがって、平均点と合格率は相関をもって同様に上下に変動しています。1989年開始当初は90%を維持していた専門医試験の合格率ですが、眼科の専門化・細分化が進むにつれて、問題が専門化し難度が上がり平均点が下がるにつれて、合格率が下がってきました。試験委員会は一つの仮説を立てました。試験委員が、自分の専門分野以外の問題を解いても合格点を取れる良問を作れば、我々よりも幅広い研修を行った優秀な若き眼科医たちは、合格点を間違いなく取ってくれるのではないかと。出題委員が各々の専門分野を担当し作成する問題が少し高度に専門化して難しいのではないかと、という意見は以前から試験委員の間で少し話合われていました。良問作成に努めた結果、2022年、試験委員会は合格ラインの得点率を6割に維持したまま、合格者を90%に戻すことに成功しました。

具体的には、小幡博人試験副委員長を中心に、試験委員が自分の専門分野以外すべての問題も解き、試験委員が解けない問題は、その後徹底的に調べて試験委員会で修正しました。試験委員も専門分野以外は、受験生とそれほど変わらないレベルの知識しかない分野もあります。受験生の気持ちになって勉強し直して解いてみて、これは、受験生が勉強しても解けないだろうという問題は、試験委員会で何回もご相談して修正をお願いしました。試験委員と出題委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

表3に筆記試験の成績を記載します。上述のように合格ラインは総合得点率6割ですから、一般問題の平均点70.9点、臨床実地問題の78.0点のどちらもこれを

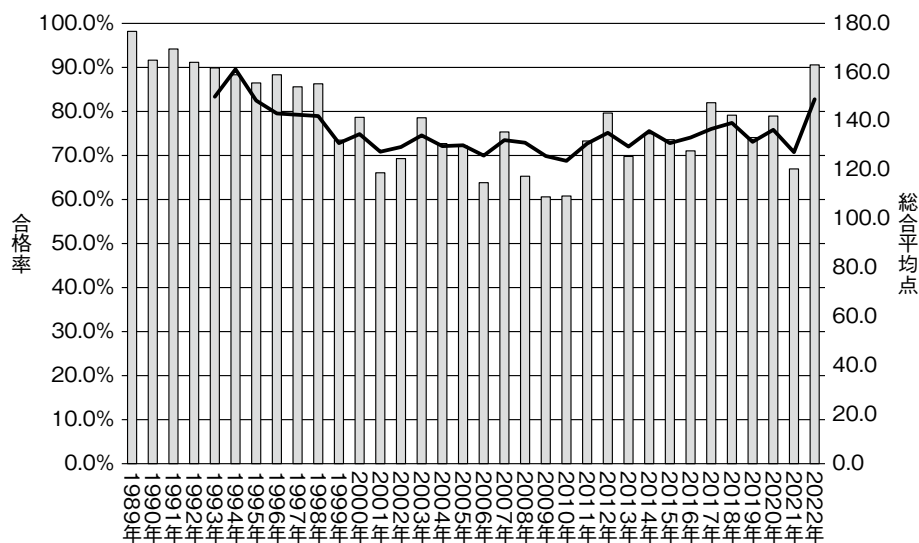


図 1 合格率と総合平均点の推移。

— : 合格率, — : 総合平均点。

表 3 最近 3 年間の筆記試験成績

		最高点	最低点	平均点
一般問題	第 34 回・第 1 回	92.0	35.0	70.9
	第 33 回	88.0	24.0	61.6
	第 32 回	88.0	0.0	65.7
臨床実地問題	第 34 回・第 1 回	96.0	42.0	78.0
	第 33 回	93.9	32.7	65.7
	第 32 回	93.9	0.0	70.8
総合	第 34 回・第 1 回	188.0	39.0	148.9
	第 33 回	175.8	62.8	127.3
	第 32 回	179.8	0.0	136.5

第 32 回の最低点 0 点は受験者 1 名が氏名と受験番号のみ記入して白紙で提出したため。

表 4 2022 年の男女別合格者数・合格率

	男性	女性	計
受験者数	215 名	177 名	392 名
合格者数	189 名	166 名	355 名
合格率	87.9%	93.8%	90.6%
初回受験者数	163 名	131 名	294 名
合格者数	151 名	123 名	274 名
合格率	92.6%	93.9%	93.2%
再受験者数	52 名	46 名	98 名
合格者数	38 名	43 名	81 名
合格率	73.1%	93.5%	82.7%

上回りました。試験問題を徹底的に修正し、勉強した受験生には点数が取れる問題を心掛けた結果と考えます。合計点の平均は 148.9 点で、昨年の 127.3 点よりも 21.6 点上がりました。

また、表 1 に示すように、2022 年の専門医試験は 90.6% の合格率となり、専門医試験開始当初の水準に戻りました。特に、再受験者の合格率が 23.7% から 82.7% に上昇しました。

表 4 に男女の合格者数・合格率を示します。一帯に女性の合格率が高く、男性の受験者にいっそうの努力をお願いしたいと考えます。

表 1 に示すように 2019 年から 2021 年までの、初回受験者の合格率は概ね 70~80% であるのに対して、再受験者は従来 20~50% でした。本年、合格ラインは得点率 6 割を堅持したにもかかわらず、82.7% に上昇したことに、眼科専門医の将来は明るいことを感じ

ています。来年以降も、試験委員会は勉強すれば点数が取れる良問を心掛けますので、是非、十分な準備をお願いしたいと考えています。一方、初回受験者も高い合格率を維持してください。よろしくお願いします。

5. おわりに

今年一つ気がかりな事例がありました。専門医試験の実施日が出産予定日に重なった受験生がおられました。試験数日前に無事出産され、母子ともに健康という連絡をいただき、専門医制度委員会を挙げて幸せな気持ちにいただきました。ありがとうございます。当然、無理をして試験を受けていただく必要はなく、欠席されたのですが、このような条件下でも、日本専門医機構の研修修了手続きをしてから 5 年以内に 5 回の受験で合格しなければ受験資格を失うという規定は適用されます。来年以降も同様の条件の方がおられると思います。対策としては、研修修了後の出産と



図2 2022年専門医試験終了直後、緊張がゆるむ一瞬。
後列左から日本眼科学会事務局の梅崎氏、茶園氏。
前列左から後藤教授、村田試験委員長、小幡試験副委員長。

ということです。受験の有効期限を延長する申請を行い、日本眼科学会および日本専門医機構の審査と承認を経て、有効期限を1年単位で延長する方法が考えられます。もちろん、個々の専攻医で条件が異なりますから、上記の提案も、一概にお役に立つとはいえません。何かありましたら、早めに、専門医制度委員会にご相談くださいますようお願い申し上げます。

今年の正副委員長と元試験委員長でご意見番の後藤浩教授、そして専門医試験開始以来支えてこられた日本眼科学会事務局の茶園氏と、今、全身全霊を傾けて専門医試験を支えてくださる梅崎氏が、試験を無事終了してほっとしている笑顔をご覧ください(図2)。来年の専門医試験の準備も始まっています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

村田 敏規
日本眼科学会専門医制度委員会
試験委員会委員長